

浮世絵物語

清水一郎さん (S48年入社、幹事)

今回は三越史料室が所蔵している浮世絵をご紹介します。ご存知の通り浮世絵は江戸時代初期に江戸を中心に広まり、明治維新まで続いた日本の代表的な絵画です。



北斎「神奈川沖浪裏」



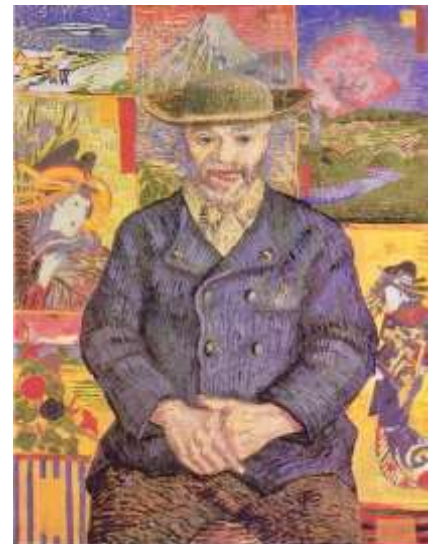
広重「東海道五十三次 日本橋」

中でも北斎や広重の作品はお馴染みですね。

浮世絵の制作はプロデューサーである版元の企画により、絵師、彫師、摺師(すりし)の分業体制が確立され、ある程度まとまった部数を制作することで廉価で販売が可能となり、その価格は「浮世絵一枚はそば一杯分」と言われていました。

初期には歌舞伎や遊郭などの享乐的な世界が対象となっていました。後に美人画、役者絵、武者絵、名所絵(風景)など幅広い題材が描かれるようになります。

1867年パリ万博に浮世絵が出品されジャポニズムのきっかけとなりヨーロッパで浮世絵の一大ブームが巻き起こります。特にゴッホは広重の「江戸百景 亀戸梅屋敷」を模写するなど、浮世絵の影響を強く受けています。また、右の作品「タンギー爺さん」の背景には多くの浮世絵が描き込まれています。



浮世絵物語

名所絵の中で越後屋が描かれている浮世絵が多数あり、越後屋が当時江戸の名所であったことが伺えます。

三越史料室は駿河町、越後屋が描かれた浮世絵を多数所蔵しており、この貴重な作品を未来永劫繋いでいくために厳重な管理体制が敷かれています。今回はその一部をご紹介します。

最初の作品は「**駿河町越後屋呉服店大浮絵** (するがちょうえちごやごふくだなおおうきえ)」です。

浮絵とは透視図法的な視覚で空間の奥行きを強調した絵のこと。

作者は**奥村政信**で、大きな画面が特徴の高級品です。

店先には呉服を求めにきた女性客に茶を給する場面などが描かれ、活気のある当時の商いの様子を知ることができます。



この作品は、**歌川国芳**作「**五節句之内・睦月** (ごせっくのうち むつき)」。新春の駿河町の路上を描いています。右は羽子板を手に子供の手を引く母親、中央は着替えを脇に初湯に向かう女、左は奴凧を持つ子供を背負う母親、中央奥には大きな達磨凧を運ぶ子供たち。3枚続の迫力のある画面が目を引きまます。

浮世絵物語

この2枚の作品はともに歌川広重作「東都名所・駿河町之図」。天保(1830-1844)後期の作で、駿河町の通りを西に見通す構図です。

木戸番小屋



天秤棒を担ぐ魚売りは近くの日本橋魚市場からきたもの。左に行商の呉服売り、左手前には木戸番小屋が見える。木戸番は町の雇傭で町内の雑用や警備などを担っていたが、少ない収入を補うため番屋の一角で草履や箒等様々なものを売っていたようです。



画面右手に行商の呉服売り2人、その左に町人の内儀の一行、中央は牛蒡や芋を売る行商か。左に武家の女の一行5人が描かれている。

浮世絵物語



広重作「名所江戸百景 す留賀てふ(するがちょう)」。
「名所江戸百景」は初代広重の晩年を代表する江戸名所揃物で目録も含めて全120図あり、本図は両側に越後屋の店舗が並ぶ駿河町の通りを、縦長の画面を生かして俯瞰している。
現在、この通りは「さくら通り」と呼ばれ左側に三越本店、右側に三井本館が建っている。

この作品も広重作の「富士三十六景 東都駿河町」。
これは広重の没後、遺稿出版の形で世に出た富士を主題とするシリーズで、全36枚揃い。
富士山を描く錦絵といえば北斎の「富嶽三十六景」が有名だが、広重のこのシリーズもその後の浮世絵風景画に少なからぬ影響を与えている。
越後屋の軒先には裏白(ウラジロ:シダ科の植物)、店先に松飾りがあるように新春の風景。路上の人物も正月らしく右から太神楽、三河万歳の才蔵と大夫、鳥追といった門付け芸人の姿でまとめられている。



専門家から大変珍しい図だと仰って頂いた作品。
五雲亭貞秀(ごうんていさだひで)作「東都名所見物異人・駿河町の風景 イギリス」。1861年作。
来日した外国人が江戸の町を散策する様子を描いたシリーズ。
現在、8図が確認されており、外国人はイギリス、フランス、ロシア、アメリカ、オランダの5カ国であり、これは安政の通商条約を締結した国々と一致します。
本図は、駿河町を訪れたイギリス人の夫婦を、江戸の人々がこわごわと遠巻きにしている様子を捉えている。

浮世絵物語



五雲亭貞秀作「神奈川横浜新開港図」。貞秀は幕末から明治に活躍した代表的な浮世絵師のひとり。透視技法を駆使した奥行き豊かな空間表現を得意とした。横浜の開港風俗を描く「横浜絵」の代表的な絵師。この図はその中でもよく知られた作品で、メインストリートである本町通りを山手方向に望んでいる。左手前の建物は三井呉服店の出店。1860年作の3枚続。

コマ絵



三代歌川豊国作「江戸名所百人美女・駿河町」。「江戸名所百人美女」は、江戸の名所を取り上げ、三代歌川豊国がそれぞれの名所にちなむ美人風俗を描き、二代歌川国久筆のコマ絵を添えるシリーズ。本図は、越後屋で反物を選ぶ女(町人の内儀風)に、駿河町から見る富士山を添える。

一口メモ

浮世絵は多色刷りで色別に版が彫られます。この数枚の版を使って摺る時に色ずれを起こさないために使うのが「見当」です。この見当にしっかり紙を当てて摺ることで色ずれを防いでいるのです。

「見当違い」「見当はずれ」等の語源とされています。

